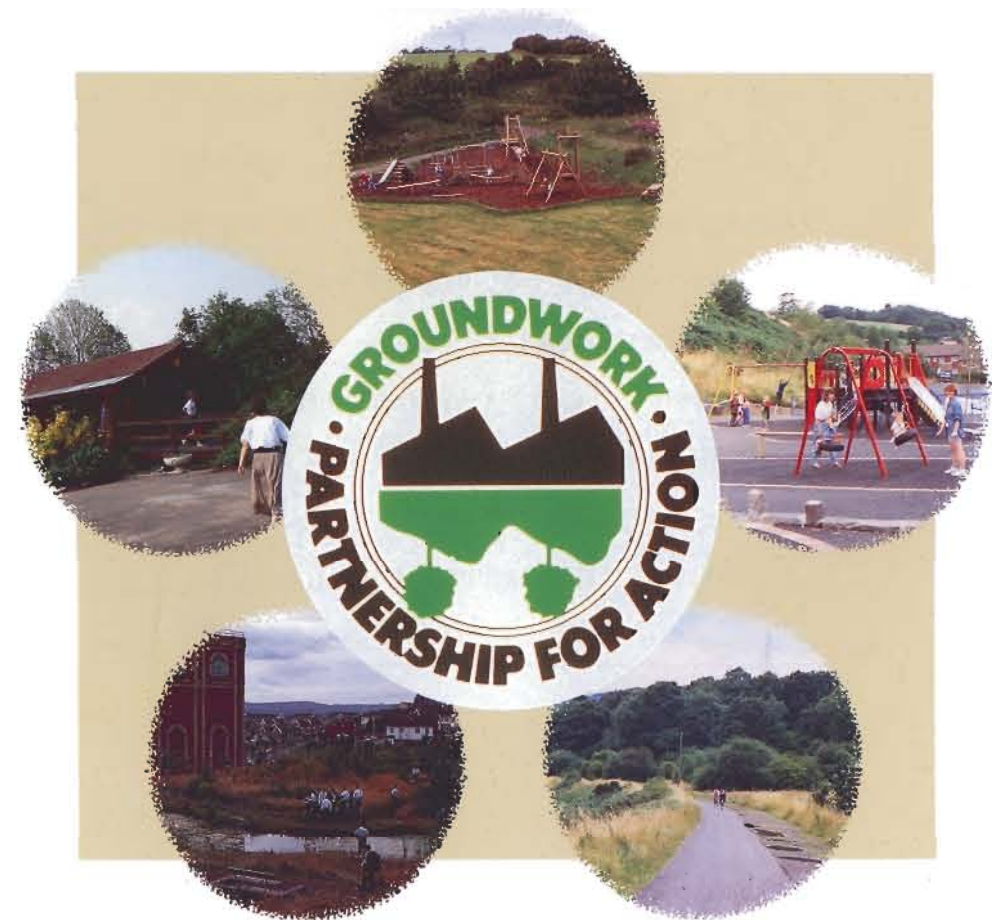


札幌市都市緑化基金創設
財団法人札幌市公園緑化協会設立

10周年記念

すくすくみどり No.7

【英国のパートナーシップによる 都市緑化活動について】

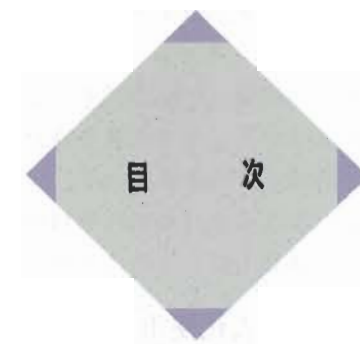


財団法人札幌市公園緑化協会

平成6年10月14日、札幌グランドホテルにおいて、千葉大学教授 丸田頼一先生をお招きして、札幌市都市緑化基金創設と財団法人札幌市公園緑化協会設立10周年を記念するセミナーを、関係業界等より約200名の出席をいただいて開催しました。

ご多忙の中を、このセミナーのために来札してくださった丸田先生から、たいへんわかりやすく、かつ示唆にとんだ内容で講演をしていただきました。

この小冊子は、当日の講演内容をまとめたものです。



目次

ごあいさつ

(財)札幌市公園緑化協会理事長 柴田浩英 … 2

「英国のパートナーシップによる都市緑化活動」

千葉大学教授 丸田頼一氏 …… 4

札幌市都市緑化基金 …… 22



財団法人札幌市公園緑化協会

理事長 柴田 浩英

私ども、財団法人札幌市公園緑化協会は、札幌市における主要な公園緑地の管理運営と、都市緑化基金の創設によります都市の緑化事業、この二つを大きな柱として設立され、今年で10年目を迎えることができました。これもひとえに札幌市をはじめ、関係する皆様方の温かいご指導、ご支援の賜物と深く感謝申し上げます次第でございます。

設立からまだ10年ということで、大きな記念事業はできませんが、何かひとつ市民の方々のお役に立ちたいということで、二つの記念事業を考えました。

一つが、一般市民の方々を対象としたものでございます。私どもの業務の中に緑の相談という業務がございます。毎年、件数は増えておりまして、年間約35,000件の相談がございますが、最近、その内容が非常に多様化、専門化してきております。そこで、札幌市民の方々にもファンの多いNHK 趣味の園芸の講師をされています江尻光一先生をお招きして、2日間にわたり、講習会と園芸の相談を実施したところでございます。

もう一つが、この「都市緑化セミナー」でございます。

10年前の昭和59年といいますと、わが国経済社会は今でいう情報化、国際化、高齢化社会に移行する時期でもあり、都市づくりの焦点も極めて明確で、この三つの課題にどう対応するかということでございました。当時、札幌市では第3次5ヶ年計画の初年度を迎え、これまで重点的に進めてきた道路、下水道などの都市基盤整備もある程度見通しがつき、やっと芸術の森やテクノパークといった芸術や経済の分野にも施策を拡げられる、まさにハードからソフトへの転換期でもございました。それが10年たちました今日、こうした三つの社会はかなり本格化

し、どの都市もこれに対応しており、むしろ今後の10年におけるどういったものに焦点をあて、その都市の個性なり、魅力を高めていくのかが、都市づくりの大きな課題となっております。

私は、今後の10年、次の21世紀は心の時代であり、心を豊かにする都市環境づくりこそが、情報化、国際化、高齢化が本格化する都市社会において、都市間競争の焦点になるだろうとみております。そして、その中心をなすのは、まぎれもなく都市の緑であります。来るべき21世紀は、経済的にも恵まれ、自由時間も十分持った人々が生活する都市社会であります。そうした人々の行動形式なり、人間欲求がどの方向に向かうのか、それに都市がどう対応していくのかが都市づくりの大きな課題であり、都市間競争の焦点になるのではないかと思います。

私はこうした観点から、長い歴史の中で今日の高齢化社会を築きあげ、十分な余暇時間を持ったヨーロッパの都市社会、そこに住んでいる人達の行動形式、欲求などは、今後の日本の都市がめざす方向に大きな示唆を与えているのではないかと思います。

今後、日本の都市においても、ヨーロッパの都市と同様に、都市の緑は一層重視されるとともに緑の質が問われる時代を迎えます。これまでの自然保護の枠を超えて、新しい自然、新しい緑を今後どれだけ都市の中に創出できるのかが、都市間競争の分岐点になるだろうと思います。このように、都市の緑といった場合に、例えば緑の質につきましても、自然の緑のほかに従来の人工的な公園を中心にした緑もありますし、最近ではビオトープといいますが、自然の生態系を重視した都市の緑という流れも出てきております。また、都市の緑をつくり出す手法にいたしましても、従来の公共用地中心といいますが、官主導の緑化事業に対しまして、例えばドイツで古くから行なっておりますクラインガルテンという手法もありますし、本日、講演していただくイギリスのグラウンドワークという手法もございます。

講師の千葉大学教授丸田先生は、諸外国のこうした都市緑化事業に精通されている日本における都市緑化の第一人者でございます。また、先般、建設省が発表した緑の政策大綱、あるいは今年度から建設省が都市の緑化基金を媒体として新たな政策として打ちだした都市の緑化事業、これの提唱者のひとりでもございます。

この講演を受け、私どもの財団は先に述べました都市観のうえにたち、時代の変化、人間の欲求の変化に十分対応しながら、今後、公園の管理運営、都市緑化の推進に全力をあげて取り組んでいく決意でございます。また、皆様におかれましても、これからの土地利用、あるいは都市の緑化にお役立ていただければ幸いです。

(平成6年10月14日 「都市緑化セミナー」の開催にあたって)

都市緑化月間、財団法人札幌市公園緑化協会設立・ 札幌市都市緑化基金創設10周年記念都市緑化セミナー

日 時 平成6年10月14日(金)

場 所 札幌グランドホテル

講 演 講師 丸田頼一氏(千葉大学教授)

演題 「英国のパートナーシップによる
都市緑化活動」



(講演要旨)

はじめまして、丸田でございます。一時間少しですが、ご静聴のほどよろしくお願いいたします。

今、紹介がございましたように、今回イギリスのグラウンドワークを中心とした緑化活動のお話しをすることがテーマになっております。限られた時間でございまして、また皆さん方によく理解していただくということから、用意しましたスライドを中心にご説明したいと思います。

本日、札幌にまいりまして随分きれいな街だなというふうに感じました。先程、柴田理事長さんからの話しにもございましたように、緑化基金創設、また公園緑化協会設立10周年ということで、そうした10年間の成果が反映されて、札幌全体が本当にきれいな街になっているのだと思います。ですから、こんなきれいな街で、そして活発にいろいろ活動されている協会、また皆さんの前で、いろいろ今後の課題や要望などをお話しをするというのはどんなものかと思いましたが、なんらかの形で役に立てればと考えておりますのでお許し願いたいと思います。

さて、グラウンドワークというお話しなんです。今から3年前の1991年に、先程、大金常務理事さんからご紹介があった環境情報科学センター(環境庁の認可団体、社団法人)の20周年記念で何とか事業をやろうということになったわけです。

私はたまたまそこのお手伝い(常務理事)をしておりますので、時折、諸外国との交信もありまして、また、特にその年はイギリスの環境省からも「グラウンドワークというのを日本でも広めてもらえないか」、また「そのためにミッションを送りたい」と言ってき



たわけなんです。そのミッションの団長にはサッチャー首相時代の名環境大臣だったジェンキン卿も含まれていまして、イギリスでもなかなか会えないような有力なメンバーの方たちがお見えになることになりました。そこで、グラウンドワークというのはどんなことをやっているのかをいろいろ調べてみたら、「これはランドスケープ、造園そのものの仕事で、随分面白いじゃないか」と思ったわけです。私は普段からいろいろなことに首を突っ込んで手広くやっているのでも正直なところあまりやりたくなかったのですが、「これは自分達の仕事だから、他の分野の連中には渡せないぞ」ということで、出しゃばって取りまとめといいますか実行委員長をやりました。このことで、学校の学生には「先生はいつ行ってもいない」とか多少叱られたような状態でした。お金もないのでいろいろな団体に頭を下げに行きまして、やっとできたような状況でした。結果として楽しんでやらせてもらいましたが、東京、大阪、奈良、熊本、阿蘇の数ヶ所で、イギリスのグラウンドワークの紹介、あるいは日本での課題といったテーマでシンポジウムを行なうことができました。その時はNHKで少し紹介された程度であまり反響はなく、また、建設省の反応もあまりみられませんでした。

しかし、その翌年あたりから日本の政府、各省庁、建設省、農林水産省、自治省、環境庁それぞれが乗り出してきて「なんかグラウンドワークというのが面白そうだ」とか「これはなにか日本でも役立つ」などと言われ始め、そして建設省では約1億円を平成6年度のグラウンドワーク整備事業費として計上して、これから5か年程調査事業を行なっていくことになりましたが、いずれは札幌市さんの方でも調査費も含めて、在り方等を検討する機会が出てくると思います。本年度は横浜、名古屋、大阪、金沢、岡山の全国5ヶ所で、その調査費を使って、日本の、特に緑化基金のあるべき姿、あるいは日本型グラウンドワークをどうしていったら良いのかが研究される、また模索され始めている、とあってよろしいと思います。

グラウンドワーク（Groundwork）事業とは

さて、グラウンドワークトラスト（Groundwork Trust）とはどういうことなのかという前に、皆さん方は「ナショナルトラスト」とか「シビクトラスト」という言葉をお聞きになっていると思いますが、ナショナルトラストというのは、景色がきれいだとか、あるいは著名人が住んでいた家だとか、そういう景勝地や文化財的な所、史跡、旧跡などを保存、保護するために買収する団体です。かなり長い歴史を持っています、イギリスでもかなりステイタスがあるといえますが、ナショナルトラストの終身会員だというと、かなりボランティア精神旺盛、あるいは余裕のある人物だとみられますし、こぞって入るような会員の組織です。

シビクトラストというのは、以前、「シビック・アメニティーズ・アクト」という法律まで作った経緯もありまして、ロビー活動もやりながら特に道路を中心とした環境改善を行なう、新たにつくるというのではなく、今ある環境をより良く改善していこうとするのがシビクトラストです。

では、グラウンドワークトラストはどういうことかということ、市民、企業、行政が三位一体となって、環境改善活動をやっていく「パートナーシップ」ということがキーワードになると思います。その場所及び対象は、最初は都市と田園が接するアーバンフリンジといわれる日本でいえば市街化区域のはずれ、そのような周辺、市街地の一番はじの所でした。いろいろなサービス業、あるいは工場のような所が汚くなってきたり、また、イギリスも日本も同様に第一次産業から手を退く人達がだんだん多くなり、そうした荒廃した平地林等をなんとかして環境改善しなくてはならないというイギリスの環境省の発案で1981年に始まったものなのです。環境省といっても日本の環境庁とは違い、イギリス環境省は他の事業官庁よりも上のランクに位置づけされています。日本では事業そのものを主体としてものを考えて、事業費が多いからこちらの部局が強いとか弱いとかと考えやすいのですけれども、イギリスの場合は計画や構想がしっかりしていなければダメで、将来的にしっかりした計画でなければ国、街、村とかはよくならないのだというプランニング重視の国なんです。環境省は、いわゆる「都市及び田園計画法」等の計画に位置付けられるものは全て包括して権限を持っています。日本の省庁でいえば、環境庁だけではなくて国土庁、運輸省、建設省、この

四省が一緒になったようなのが環境省といえます。それで、ある枠の中において事業をやりなさいと、制約、歯止めをきかせているわけです。その環境省が、国や地方の行政の方から補助金等もグラウンドワークトラストに入れながら、環境改善をやっていこうとなったわけです。

最近では、グラウンドワークトラストの対象もアーバンフリンジだけではなくて、市街地や都市の中にまで入ってもいいことになり、都市の中の環境改善まで試みるようになってきております。

グラウンドワークの事業内容

グラウンドワークの主な事業内容は、①工場や企業の事業所の修景緑化、②広場や公園の整備、③環境学習の視点を重視したフィールドの確保、④都市近郊農地、林地の保全、⑤植樹、河川浄化のキャンペーン、⑥環境保全グループへの支援、⑦歴史的建造物の買い取りとトラスト事務所としての活用など、とにかく幅広く行なっています。いろいろ特色もありますし、また補足してご説明申し上げますけど、スライドの前にとりあえずイントロとして若干紹介させていただきました。

（スライドをお願いします。）

最初に出したのがグラウンドワークのロゴマーク。それからパートナーシップ・フォー・アクションという、先程パートナーシップの言葉を申し上げましたが、その三者が一体となって活動することで文字が書かれています。また、中心部の上に工場の印があって、下の線はそれに不随させて緑化、環境改善をすることです。



グラウンドワークトラストの数は、去年は32箇所、今年の夏にイギリスに行きました時に聞くと、トラストは全国で40箇所になったようです。

グラウンドワークトラストの第1号はリバプールの周辺でした。その後、急ピッチでいろいろな所にトラストが設立されています。最近では、先程申し上げましたように日本も含めて外国にもミッションを派遣しまして、ポルトガルにも年内にトラストの支部が設立されそうだとはいわれ、世界各地に波及する気配といえます。

イギリス国内では、環境省と開闢地域委員会という環境省の付属機関があって、ここが補助金を担当して、住民運動で環境改善の強い要望がある所、ボトムアップ的に

グラウンドワークトラストをつくる必要性がある所にトラスト設立を働きかけています。

一時、日本でもアメニティとは何かを議論する研究会もできた時期もありました。イギリスでよく使うこのアメニティという言葉は、アメリカあたりでは殆ど使いませんが、なかなか難しい言葉で、心地よいとか、あるべきものがあるべき所にあるのようになんか難しく解釈されたりしていますが、平たくいえば快適性ということです。イギリスはアメニティの国であり、ディスアメニティ、環境破壊には神経をとがらせています。



イギリスには現在、11国立公園がございますが、国立公園に限らず風光明媚な所が多いのです。しかし、都市の近郊で汚い所、特に工場周辺が汚いということが社会問題になって、このグラウンドワークトラストの出番になってきたわけです。



1985年にはグラウンドワーク事業団 (Groundwork Foundation), 日本語風にいうと意識になりますが全国協議会、そのような全国的な組織が、昔の建物を借りて本部をバーミンガムに置き、主にトラストの新設や全国のトラスト運動の情報を統括して連絡を取り合ったり、全国キャンペーンをしたりしています。

以降、個々のトラストの説明をしますが、先程のマークとほぼ同じもので、下の部分にその地名が入ってまいります。



事務所前



事務所内部

これは、ウェールズのマーサー&カノンという所のグラウンドワークトラストです。裏側にあるのがそのトラストの事務所で、前にあるのがロゴを背負った小さな車です。ここのトラスト自体ができてまだ6、7年で、財政事情が悪いのをしのいでいることもあって、どこにトラストの事務局を求めているのか右往左往して間借りしている最中です。この後ろが、昔精神病院だった所で、事務局にしているのです。その中を写したものです。

ここもそうなのですが、トラストが1981年に初めて誕生してから足掛け13年になりますが、できてから6、7年の所が多く、スタッフの数はだいたい20~30名が普通です。

ドラフターを置いて、ここで図面を描くことをしているわけです。

これはロンドンのヒースロー空港のそばのコーンパレイトラストですが、市民参加によるトラストの視点から、誰でも自由に行って勉強できるインフォメーションセンターであること、そのためにもインフォメーション機能、ビジュアライズ機能を重視しているわけです。その地域の環境問題であるとか、グラウンドワークトラストの活動や必要性などを誰でもわかるようにパネルで紹介しています。



トラストの運営は理事会と事務局からなりますが、事務局は所長、副所長の他に一般的には7つのチームで構成されています。個々のプロジェクトを推進するプロジェクトチーム、維持管理を行なうアフターケアチーム、市民や子供に環境学習の大切さを教えたり実践するコミュニティ活動チーム、植生調査や緑化手法・技術開発などの研究開発を行ない、そこには自然保護グループの人達とかランドスケープの専門家といった人達が入っている研究開発チーム、特に財政問題を担当する財政総務チーム、テレビとか新聞のようなマスメディアを担当する広報チーム、それと大型事業を担当する特別のプロジェクトチームがあります。

次にその具体的な活動内容に入らせていただきますが、ひとつは学校関係です。

子供達が学校園をつくるということ。行動に対してトラスト側からのアクションがあって一体となって学校園の整備をします。この資金は地方の自治体、場合によっては環境省、田園地域委員会等の補助、それから企業からのトラストへの寄付もあります。



先程、理事長さんからビオトープ (Biotope) のお話がありましたが、最近では身近な自然を回復させるということが、日本でも2年ほど前から日本語化したくらいに流行言葉になり、全世界的な潮流のひとつになってきています。

ビオトープも、やはり難しい概念だと思いますが、学校園や野外に水面をつくる、

あるいは残す、そうすることによっていろいろな動植物、生物がそこから発生してくるということを大切にする考え方です。ドイツでは、大小を問わずに、これから造成する公園には100%池を造っています。日本では池を造る場合、鯉などを放流しますが、小さな生き物を食べてしまうということもあり、それはしません。あくまでも自然な状態で水をはっておくということです。

これは工場です。

トラストのスタッフと工場の方の打ち合わせがまず行われます。これが面白いと思うのですが、例えばある工場がとても汚い、周りが荒れていると、トラストのスタッフがその図面を描くのです。その工場の許可、申し出、依頼などがなくても、とにかく描いて、そしてその図面を工場の方に持っていき、「おたくの工場はずいぶん汚いけど、こういうふうにきれいになるよ」と提案します。工場の方でこれに賛意を示してくると、今度は図面を描いたお金とか、実際に設計したり、つくったりするのに必要なお金を払わせたりします。かなり強引というか面白いやり方だと思うのですが、こういった一つ間違えれば嫌われるような活動もしています。また、今ありましたような打ち合わせ等を片方でやって、もう一方では子供を連れて行って、子供達が苗木まで持って行って植樹作業をしてしまうということもあるのです。それに見かねて企業、工場の方も「熱心に取り組もうか」とか「そのためには金銭も工面しようか」ということになり、こうしてあくどく活動するのです。

ここはチョコレート工場です。先程の手順で、図面が描かれ施工されました。

また、もうひとつ面白い点があります。先程、子供達を連れてとか、抱き込むとか申し上げましたが、このことは環境学習という意味においてたいへん重要なことです。これは日本のせいかもしれませんが、最近では世界的に子供達がテレビゲームに夢中になってテレビの前に張り付いてばかりいて、家の外に出たがらない。それで土とか生物とのふれあいが少なくなってきており、大人になるまでの長い目で見た場合、いわゆる情操教育とかの面でも深刻な問題だということなんです。ドイツでは、これも先程、理事長さんからご紹介がありましたクラインガルテン、市民菜園運動が、



チョコレート工場

産業革命の時代に出てきました。その時はシュレーバーというライプツヒの精神科医と、ハウスシルドという教育学者が中心になって、これからの子供達はやはり自然とのふれあいを失ってはいけないということからクラインガルテン運動というのが始まったわけです。最初は、街の広場とか公園の空き地のような所にイチゴとか花とかを栽培することから始まったのですが、それを家族ぐるみで楽しませていった方が効果的であるというので、百数十年かけて市民菜園的なものに移行していったのです。

話が横道にそれましたが、このような環境学習という意味において、できるだけボランティアの子供達をこの作業の中に組み入れようとしています。また、それに伴って大人も組み入れることもしています。日本も将来的にみて、週休二日制になって週に1回くらいはなんらかの形で参画し、社会貢献してもらう時代になってくるのではないのでしょうか。

イギリスではボランティアが定着し、またトラストの中に自分達の作業場すら持っていますから、できる範囲は自分達でやってしまおうという意識があります。もちろん専門的な知識や技術が必要な場合は、そうした方達にお手伝いしていただきますが、かなりの部分は素人で作業していくのです。

ボランティアの大切なことは長続きさせるということで、苦しんでいてはなかなか長続きしませんし、楽しく和気あいあいと行なうことが必要です。

それから、また先程のチョコレート工場に戻りますが、ピオトープを意識して池を造ったり、あまり手入れのいらない放置型の庭園にしています。

ここも環境学習の視点から、子供達を取り入れて、みんなで手入れをしています。

また、イギリスでは工場周辺が汚いというので、ブライトサイト、輝く敷地というような言葉を使い、キャンペーンを行なって一般的な運動の他に特別なプロジェクトを組んでいます。これに対しては、シェル石油がスポンサーとなり、永続的に毎年資金を出して、全国



チョコレート工場自然公園



の候補地から選ばれた所にそのお金をつぎこんで環境改善運動を行なう事業を行なっているのです。

余談になりますが、日本にトラストのミッションがやって来た理由には、イギリス現地にたくさんある日本企業がこうした環境改善活動に不熱心だということもあるのです。それで、ミッション側が日本の経団連に行くことになり、企業の皆さんにお集まりいただき、昼食会なども開いてもらい、グラウンドワークの話もされたのですが、ミッション側は「これはたいへんよかった、大成功だった」と喜んでおりましたが、何ひとつ成功していないんです。その後、イギリスに行ってみましても、ウェールズの30社程ある日本企業はびた一文、一円も出さない、協力しないというので「日本の企業というのは、どこを向いて仕事をしているのか」と見られているのです。これだけ国際的な時代になってきておりますし、日本も何をすべきかという課題が、あらゆる方面であるのではないかと思います。

これも余談になりますが、日本でシンポジウムを行なった時、私の学生にそのお手伝いをさせたら「グラウンドワークというのは面白そうだ」ということから、決まっていた就職先を断わって渡英して、現在、トラストの事務所にボランティアで頑張っています。彼は英語ができないということもあり、私は心配で向こうの所長さんに会い、彼の近況を聞きますと、「彼は体力があって、穴掘の名人だよ」というんです。毎日、スコップを持って穴掘ばかりなんて可哀相だなと思っていたのですが、最近の手紙では、少しずつ英語で会話もできるようになり、トラストの図面も描けるようになって、僅かな日当も貰えるようになったということです。

次に、コミュニティ、いわゆる地域社会です。

地域社会もいろいろな問題がありますが、トラストの理事会は地域の皆さんで構成されています。市長・市議会議員、企業代表、市民、事業団からの任命を受けた代表の四者からなり、約15名が理事会のメンバーとなっています。そこで、身近な社会で何をやるべきかということを議論するのです。また、作業にあたっては地域の人たちに集まってもらいボランティアで活動してもらいます。

それから、企業の参加はどうあるべきかということを一言述べさせていただきます。日本では企業の参加イコールお金の拠出というイメージがあるのですが、お金だけではなくて、例えばボランティアとしての参加、専門の機械やショベルカー、トラック、あるいは企業の敷地の無料貸与など、さまざまな参加の仕方をグラウンドワークでは

考えています。こういったこともあり、日本にミッションで来られた方々の中には、イギリスの労働組合の代表者もいらっしゃいましたが、グラウンドワークを全面的に応援しているとのことでした。

なお、プランニング、デザインはトラストの方でしますが、その際の考え方は、安いコスト、安いメンテナンス、維持管理の費用をあまりかけないのが一つの方針としてあります。ですから、多少専門的に見た場合、ずいぶん安っぽいなと感じるかもしれませんが、こうしたポリシーもたいへん重要なことだと思います。

ここはロンドン近郊の住宅団地で、少し見にくい部分ですが、多少木が植えてあります。これは、ワンラウンド植樹していた所に、そこに追加して植樹する場合にグラウンドワークを使った事例です。



この場合は、あるスーパーからお金が出ています。そのスーパーのグラウンドワークの考え方として、ボランティアによる植樹によって、不良化防止に役立つだろうとも言われております。したがって、そうした効果を含めてできるだけ少年達に参加してもらって木を植える、その時にはお金を出すことをしているようです。

皆さんはこれをご覧になって、なんだ随分地味だなとか、なんだこれくらいのことかと思われるかもしれませんが、全体に共通する問題として、結果や成果ということよりも、植樹や環境改善運動のプロセス、つまり過程を大事にするのです。ですから、先程お話ししたような子供達に参加させたり、ボランティアを奨励したり、また環境学習や情操教育の場としての機能も重視しているのです。



これはグリーンプランの事例です。ここはウェストカンブリアの老人ホームで、その横の部分がグラウンドワークによって緑化されたのです。日本でいえば、公共公益施設の緑化です。このトラストではグリーンプランと名づけて、いろいろな役所などの公共公益施設をグラウンドワークによって緑化しています。

それから、公園の整備があげられます。いくつかの公園をお見せします。

公園の整備は、イギリスでもやはり自治体でもやりますが、みんなに喜ばれるものをつくるのであれば、

自治体であろうと誰がつくってもいいじゃないかという考え方です。では、自治体とグラウンドワークとのボーダー、区分けはどうするのか、という質問がたいへん多いのですが、いいことなら誰がやってもいいじゃないかということです。

グラウンドワークトラストにしても、営業ベースというか、お金ということを考えながらやりますし、政府や州、企業からのお金も貰います。それから自分たちも努力しながらもうけを出してくるのです。実際、そのトラスト自体は皆さん方が想像されるようにチャリティ団体、あるいはボランティア団体というか、あまり収益を重視しないんですが、収益性も加味します。日本ではそういった考え方が定着していないのですが、イギリス独特の考え方として、少しややこしいのですけれども、チャリティ団体であって、会社でもあるというような、その両面があるわけです。それで、自治体のお金までもらってくる。また、トラストは、「トラストは市民に顔を向けて、市民からも愛されているし、自治体の場合だとどちらかというと対市民、対役所というふうに見られがちですが、トラストはもっとオープンで、開かれており、企業からもお金はくるし、市民が接触しやすく、自治体等からの補助はあるし、したがってお金もあるし、トラストにお金が入った方が自治体にまかすよりもいいものができる」というのが言い分なんですね。ですから、トラストでも公園を造ってしまいます。札幌の場合はどうか分かりませんが、日本各地にある緑化基金のいくつかはナショナルトラスト的な活動というか、用地取得もできるような定款になっています。これも今後大切です。

写真はウェストカンブリアの公園です。



この公園の一角なんですが、手入れが悪くて少し見にくいのですが、手前の所に植樹しているんです。向こうの橋は昔からの鉄道です。



また、このようにベンチの下部分に子供達にいろいろ絵を描いてもらって、それをもとにモザイクタイルをはめ込んだ事例です。もちろん子供達がはめ込んでいます。



田園地帯のかんりのんびりした所で、こんな所に公園なんて必要なのかなと思ったのですが、子供達が自転車で10分から15分かけてここにやって来ました。こうした田舎ではこれくらいの公園でも珍しく、すごく喜ばれているようです。



それから現在ある公園をより一層きれいにする、やはりウェストカンブリアの緑化活動です。この一角がトラストの所有分になって、再整備と花壇づくりをまかせられているケースです。



これはウェールズの公園です。ある炭鉱地帯の住宅団地の横の公園をグラウンドワークトラストが整備したものです。



公園は以上ですが、もうひとつの活動成果としてあげられるのが自然学習センター、ネイチャースタディセンター。そういうものがとても多いんです。このロンドン近郊の場合は、敷地が電力会社所有ですが、そこにトラストが自然学習センターをつくって一般に開放している事例です。そのセンターには必ずレンジャーがありますが、有給の人、ボランティアの人、いろいろな方達があります。

これは自然学習センターの周りのジャガイモ畑ですが、自然学習センターをボランティアで手伝ってくれている子供達が自然学習の視点からつくり、そのお手伝いのいわば報酬としてジャガイモをタダで子供達に配っているのです。

これはグリーンストリートです。これまでの事例は点的なものが多かったと思いますが、線的なものも若干あります。道路緑化と言えそうですが、個々の工場をきれいにするだけでなく、線的な環境修景もしております。このウェールズの場合、約2kmありますが、そのためにトラストで図面を描いて、それぞれの関係する企業とか工場に接触して、ある程度はお金を出してもらい事業を推進するのです。この種のことを日本でも行なったらいいのにはと思います。個々の店や工場で修景するだけでなく、全体としてみればどうなのか、また街路樹はきれいだがもう一本その両側に植えたらもっと美しい沿道になるのではないかと思います。

余談ですが、トラストでこうした木を植えると3割程は誰かに持っていかれるらしいんです。先程の私の教え子によると、なにしろイギリス人というのはよく物を盗むというんです。盗まれないように外側に網を張っているんです。



自然学習センター



道路緑化を提案し市民に公開する図面



つぎに、鉄道の緑化です。ここに線路がありますが、もう一本ここにあったんです。それで廃線により線路がいらなくなって、その部分を埋め立てて、このように植樹しているのです。

まだ植えたばかりなのでこれくらいですが、これから生長すれば「緑の駅」になることでしょう。

この鉄道の緑化については、「緑の鉄道」がグラウンドワークのキャッチフレーズになっています。それともうひとつ、「青い水路」もキャッチフレーズにしています。ですから、河川や運河の周りの清掃、植樹などもやっています。

最後は、こうした市街化の周辺部といいますか、カントリーサイド、すなわち田園地帯に入っています。

イギリス人は、日本人と比べて本当によく散歩やサイクリング、乗馬などで動き回ります。そして、楽しむということをカントリーサイドに求めるのがイギリスの国民性です。自然遊歩道は東京や東海道などにもありますが、イギリスの考え方を模倣して出来たのです。

したがって、街の周りをグルッと一周できるように整備して、景色も楽しめ、またいろいろな小動物に出会う機会を増やし、自然観察したり、環境学習にも役立つ散策ルートをつくることもトラストの仕事になります。

また、日本でも里山の保全というような大きな課題がありますが、そうしたことにまで手を広げております。

それから、牧場の周囲のフェンスが壊れかかってきたものを修復することも活動内容です。

本来、このフェンスは生垣の方が良いのですが、手入れなどの手間がかかるために、最近では板のものが多くなってきています。

最近、日本でも緑道の整備が行なわれますが、イギリスでもトレイル整備が盛んです。イギリスはその昔、産業革命でいろいろ成功した国ですが、その後、鉱山等も閉



廃線駅の駅



山になり、鉄道の機能もなくなってしまったために、自然探勝路や自転車道にするのです。これもグラウンドワークの大きな事業のひとつです。

写真はウェストカンブリアの自転車道です。自転車道の上の方に橋がありますが、このデザインは子供達にやってもらい、それを鋳物屋さんに頼んで作ってもらったものです。

ウェールズの首都はカーディフですが、そのお城から渓谷沿いに廃線敷等を利用したり、新たに用地を買収し、88kmの自然探勝路をつくっています。ここは幅が3mほどで、これをずっと国立公園の中までつなげ、都市と国立公園、あるいは田園、それを全部「線」でつないで楽しんでもらうことを行ない、完成させています。

橋を作らなければいけない場合も、ある程度までは専門家に作ってもらい、そのあとはボランティアの人も含めて、みんなで完成させるのです。

このような際、やはり専門家というのが横についていて、怪我というのはほとんどないようですが、一応トラストの方で手伝っていただく時には、いわゆるボランティア保険に強制的に加入させ、手伝っていただくことになっています。

なお、多くの場合、事業が完成しますと、チャールズ皇太子は環境問題に重大な関心を持っておられますし、気楽にこうしてお祝いの場によく現われるということです。

(以上でスライドを終わらせていただきます。)



完成した88kmの自然探勝路



自転車道

日本におけるグラウンドワーク事業の課題

グラウンドワークトラストの活動がお分かりになっていただけたと思いますが、意義や、わが国における今後の課題を最後に少しだけお話しさせていただきます。

一点目は、いろいろ説明の中にもありましたように、イギリスのグラウンドワークトラストは地域に開かれたトラストに考え方の原点があり、いわゆる地域の環境情報センターとしての機能、位置付けを持っていることです。現在、日本各地の緑化基金は全国に約240もあります。また、昨年来、今後の緑化基金はどうあるべきかについて、私どもが建設省の委託を受けてまとめた中で、日本の緑化基金をイギリスのグラウンドワークの活動や機能と比べた場合、より考えていく点も多いだろうということ、特に環境情報センターとしての機能の面に欠けるんじゃないかという指摘がありました。

二点目は、事務局のスタッフです。やはり先程申し上げましたように、トラストはだいたい20人から30人くらいの人数で運営しています。聞くところによると、札幌市の公園緑化協会でも30人程のスタッフがいらっしゃるそうですし、だいたい同じくらいだと思いますが、日本全国の緑化基金を調べてみますと、6、7人のスタッフで運営しているところがほとんどなんですね。今日お話ししたようなことを6、7人でやろうとしても絶対無理だと思いますし、その辺に再考の余地があるのではないかと思います。イギリスのグラウンドワークトラストでは優秀な人材を集めるため、全国紙に求人広告を出しているようですが、このような点も大切であると思います。

三点目は財政の問題です。日本の緑化基金の多くは条例型の基金でして、役所の方々がその基金を運営していくことが多いのです。また、試験研究法人等の機能を持たせることによる寄付に対する免税措置の課題もあります。さらに、グラウンドワークの場合、その財政のやり方を見ますと、基金がたまってから事業を開始するという日本型のものではなくて、活動しながらお金をためていくことをしています。ですから、基金が10億円たまってからとか、50億円たまってから活動を行なうというのではないのです。トラストの運営費とプロジェクト運営費が二本立てになっているのです。例えば、先程見てもらいました工場緑化などをする場合、企業、環境省、地域の自治体など、いろいろなところからお金を集めて、プロジェクトに対しての支出に費やされます。トラストの運営費というのは、だいたい環境省、田園地域委員会や自治体からの収入が殆どですが、プロジェクトの方で金に多少でも余裕が出たら、それをコアの運営費といいますか、トラストの事務局の運営費の方に回していく、二本立てで運営する、かなり柔軟性のあるやり方をしています。日本の場合、基金があっても、その果実、利子が少ないからなかなか活動しにくいように思いがちですが、やはりプロジェクト運営費というのを今後考えていくことが大切だと思います。

四点目は、何度も申し上げましたようにプロセス重視型であることです。子供の環境学習とか、企業の人達の環境学習という、物の成果よりはプロセスを重んじて活動していることです。

五点目は、企業の参加や取り組みがずいぶん熱心だということです。これは日本の企業の方達ももう少し理解を示していただきたいのですが、日本の場合ですと「景気が悪いから、なかなかそんな余裕がないからね」というのが口癖です。イギリスですと、長年景気が悪い国ですから、その理由は通用しません。ですから、イギリスで日

本からの企業が地域に腰をおろして経済活動をやっているなら、地域のために何かするのはあたりまえですし、日本の企業が何も協力しないのはおかしいんじゃないかと思われているみたいなのです。そのあたりはもう少し発想を転換させていかなければならないだろうと思います。

最後に、先程も申し上げましたが、今後目指すテーマとして沿道緑化や鉄道緑化が、特に有効であると思います。

つたないお話しで恐縮でしたが、時間がまいりましたのでこの辺で失礼させていただきます。ご静聴ありがとうございました。



札幌市都市緑化基金

緑あふれる街づくりのため
都市緑化基金の募金にご協力を
お願いいたします。

都市の緑は、私たちの日常生活に四季おりおりの季節感や、心のゆとり、やすらぎとうるおいといったかけがえのない充足感を与えてくれるものです。

札幌市は、道路、公園などの公共施設の緑化をはじめ、市民の方々の協力を得ながら地域の緑化に努めて、現在、全国でも屈指の緑豊かな街になりつつあります。

しかし、街全体が緑と花と木陰につつまれた「ゆとりとうるおいのある街」を実現するためには、公園などの緑だけではなく、個人の住宅や事業所の周辺などの私有地の緑化がぜひとも必要になってまいります。

札幌市都市緑化基金は、市民の皆様からご寄附いただいたお金を積み立て、その果実（利子）で私有地の緑化を進めていこうとするものです。

私たちの街札幌を次代の市民に誇れる緑豊かな魅力ある街にするため、「札幌市都市緑化基金」の積み立てに市民の皆様の温かいご協力を賜りますようお願い申し上げます。

札幌市都市緑化基金はこのような事業を実施しています。

ツタ苗の助成

目的／ツタで壁面などを緑化し、身近な緑を増やすため。

対象／市内の住宅、事業所など。

補助数／植え込み延長の30mまで、植え込み総本数の50%。

申し込み／春と秋の年2回。
「広報さっぽろ」等でお知らせ。



記念樹プレゼント

市民を対象に、結婚、出産、新築といった人生の節目を記念して、ライラック、ツツジ、ウメなど10種類の中から希望の苗木をもれなくプレゼントしています。

応募は往復ハガキで、返信用ハガキが引き換えになります。

春と秋の年2回
「広報さっぽろ」等でお知らせ。



フラワーポットの貸し出し

対象／市内の町内会、自治会、商店街等。

個数／1団体あたり30個以上100個まで。

規格／700mm×240mm×200mm。

期間／3年間。

貸し出しの初年度のみ、培養土と花苗を1ポットあたり5株つけます。

申し込み／春のみ、年1回。

「広報さっぽろ」等でお知らせ。



ツタ緑化モデル施設の指定

ツタによる緑化推進の模範となるような市内の家庭、事業所などをモデル指定。



穀物祭／豊平区中の島1条9丁目



株式会社濱野建村店／中央区北3条東5丁目



小西信義宅／中央区宮の森3条11丁目



ヴァンローゼ／中央区北3条西2丁目



札幌競馬場／中央区北20条西15丁目



六花亭製菓株式会社／南区真駒内上町3丁目



中野診療所／東区北13条東16丁目

その他の事業



各種緑化コンクール



園芸講習会



花や緑に関する
催し物への
協賛等



緑化パネル
の展示



移動式樹木プランターの設置



花と緑のフォトコンテスト

花と緑に関する
手引書の発行



札幌市を通して寄附していただいた場合は、税法上の優遇措置が受けられます。



基金に関するお問い合わせは

札幌市環境局緑化推進部自然保護課

〒060 札幌市中央区南1条東1丁目 大通バスセンタービル1号館
TEL 211-2532

財団法人札幌市公園緑化協会

〒060 札幌市中央区南1条東2丁目 OFFICE 1・2ビル
TEL 211-2579